

エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

第2回 初めてのアラビア湾岸

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

2-1 アブダビ - アラビアの異常な暑さ

テヘランに滞在していた1973年8月初めに、暇を見つけた私はアラビア湾岸諸国を廻ってみることにした。まず目指したのは、関連会社のアブダビ石油が原油生産を開始していたアブダビ（1971年に7首長国で結成したアラブ首長国連邦（UAE）で最大の首長国で、面積は全体の約80%の67,340平方キロメートル。UAEの面積は、83,600平方キロメートル。日本の四分の1、ほぼ北海道程度）。

テヘランからシラズへ。そこでアブダビ行き飛行機に乗り換えて飛び立ったのは、夜の10時過ぎ。初めてのアラビア湾岸への旅。窓から見る夜空には星がまたたいていた。しばらく飛行して機が高度を下げたのを感じて見降ろすと、下界は一面の闇。やがて、その闇の中にポツンポツンと赤いものが見え始めた。目を凝らすと、ゆらめいているようにも見えた。「油田の火だ！」と気付くのに時間はかからなかった。

闇の部分は海、赤く見えているのは油井で廃ガスを燃やしているフレアスタックの火だ。火の数が増え、やがて飛行機の翼が油田の火に赤く映え始めた。眼下は油田の火、火、また火。「どこの油田の火か。アブダビ石油のムバラス油田か、メジャーのウム・シャイフ油田か、それともダス島の火か」と私は訝った。

そこを過ぎてまもなく、大地にへばりつくように点在するオレンジ色の灯りが見えた。アブダビの街のようだった。まばらな街の灯り、私は「最果ての地に来たんだ」というそれまで感じたことのない底知れぬ寂寥感に襲われた。

空港に着陸して滑走中の飛行機の窓から外を見ると、火が焚かれたドラム缶が並んでいた。近代的な照明灯がまだ整わず、油を燃やした火が滑走路の位置を示していた。外は、一面の野っ原。飛行機が静止しドアが開き機外に出ると、全身がむっとする熱風に包まれた。溶鉱炉の前にも立ったような感じであった。初体験のアラビアの空気は、異常な熱さだった。

空港ゲートには、アブダビ石油に出向中のかつて東京本社で仕えた小林先輩、初台の独身寮で一緒だった南井などの懐かしい顔が並んでいた。その夜、私は当時アブダビでできたばかりのヒルトンに投宿した。当時アブダビでは、ホテルは他にアライン・パレス・ホテルとビーチ・ホテルがあるだけだった。

翌朝市の中心部にあるアブダビ石油の事務所を訪れて、松浦駐在代表や藤田所長に挨拶をして、聞いた会社の状況は芳しいものではなく、事務所にも重苦しい雰囲気漂っていた。日産10万バレルの生産計画に対して1万1千バレル強の原油しか出ていない。原油価格もバレル当たり3ドルを超えた辺りで、こんな生産量と価格では採算がとれないというのだった。

社員たちはそれなりに整った会社の施設内で生活し働いていたが、ほとんどが家族を日

本に残しての単身赴任。アブダビ石油の敷地に隣接していたアメリカのフィリップス社の社宅は庭付きの瀟洒な洋館群。仕事を終えた欧米人のご主人たちが庭で奥さんや子供たちとくつろぐ風景がいやおうなしに目に飛び込んでくる。

同社はアブダビの陸上を試掘中で石油はまだ見付かっていなかったが、家族が住める立派な施設、学校、教会までをまず建てていた。日本は金もなければ考え方も違っていた。社宅などは石油が見付かってからの話である。こんなことも社員の士気に影響していたのかもしれない。

アブダビ石油の石油利権の獲得を成功に導いたのは、丸善石油元副社長の杉本茂である。杉本は気宇壮大で、アイデアに富む人物であった。1950年代に当時世界最大のタンカー「つばめ丸」を建造し、自動車がまだ普及していない当時の日本で余剰となっていたガソリン留分のアメリカへの輸出を考え出すなどして、丸善石油を民族系の一方の雄に育て上げる原動力となった人物である。

ますますの活躍が期待されていたが、1964年の丸善石油の経営危機の責任を問われ、主力銀行によってその地位を追われて野に下っていた。しかし、周囲の状況は、杉本を野に置いたままにはしておかなかった。

彼が表舞台に復帰するきっかけとなったのは、1967年、住友商事監査役の広瀬満直のバイルート訪問である。退任の直前に1934年に卒業したケンブリッジ大学の学友であるパチャチ博士に会うことが目的であった。パチャチはイラクの元経済大臣で軍事クーデターでイラクを追われ、当時バイルートで石油コンサルタントをやる傍ら、アブダビのザイド首長の石油コンサルタントを務めていた。広瀬はバイルートでパチャチから「石油メジャーがアブダビでの石油利権の一部を放棄する。これに、興味がある日本企業はないか」と打診された。「ザイド首長が国際入札ではなく、日本企業に随意契約で利権を与えたいとの考えを持っている。利権交渉は自分が任されている」とも説明した。

広瀬は帰国後この話を当時社員をアブダビに駐在させていたパシフィック・コンサルタントの河野社長に話し、河野経由でエネルギー問題に関心のあった右翼の大物田中清玄に繋いだ。田中は日本興行銀行頭取の中山素平に会い、両者は民族系資本でのこのプロジェクトの推進に合意した。中山は民族系石油会社である丸善石油、大協石油、日本鉱業を加えたコンソーシアムの結成を仲介し、田中が推薦する当時浪人中で那智の滝に打たれていた杉本を探し当てて東京に呼び出した。1967年夏のことであった。

「杉本君、交渉のためにすぐにバイルートに飛んでくれ。アブダビの石油を日本に持ってこれるのは、君しかいない。君に交渉の全権を任せる」と中山が杉本を口説き、杉本も「これが石油人としての自分の死に場所」と覚悟してこれを引き受けた。

杉本はその年の8月、9月、10月、12月と4回に亘ってバイルートやアブダビに出張し、精力的にこの石油利権獲得の交渉に当たった。交渉相手は、パチャチ博士。

この利権の入札には、米国系独立石油会社2社とカナダ系1社も参加したが、パチャチ博士の推薦もあって、厳しい交渉の後に日本勢がこの利権獲得に成功した。

12月6日夜11時過ぎアブダビ西部のアラインにある王宮で、パチャチ博士立ち合いの下でシェイク・ザイド首長と日本側が利権協定書に署名をして、アブダビ石油への利権供与が成立した。1957年12月にサウジアラビア政府と1958年6月にクウェート政府との石油利権契約締結に漕ぎ付けたアラビア石油に次ぐ、わが国の石油開発史上2番

目の快挙であった。

当初からアブダビの石油利権を欧米以外の日本企業に供与したいと望んでいたザード首長は調印式の席上で「第2次世界大戦で壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず、驚異的な発展を遂げた日本に対し尊敬の念を示されることに、東の国から初めてやってきた日本企業の成功を心からアッラーに祈る」と述べられたと、この時通訳を務めた吉田祐司が書き残している。

アブダビ石油の開発事業は1968年から始まった。掘削に当って、杉本は齋戒沐浴して写経した般若心経を収めた筒を油田内の各井戸に埋めさせ「自分の命を縮めても、この事業を成功させて下さい」と般若心経を唱えながら祈ったという。

その願いが天に通じたのか、昭和1969年9月に第一号井から出油を見たのであった。この油を見て、さすが豪気の杉本の目にも涙がにじんでいたと仄聞する。

また、部下思いの杉本は、「こんな暑い所で働いてくれているみんなには、日本に帰ったら家の1軒も建てられるようにするのが俺の務めだ。事業の先行きは心配するな。大丈夫だ、これから石油価格は必ず上がる」と国際石油情勢の先を見越して社員の士気を鼓舞していた。

「杉本先輩が心身を捧げるこの事業だ。今年5月にムバラス油田の生産にこぎつけ、6月6日には日本向けの初積み出しを終えたばかりだ。なんとか、このアブダビ石油の事業が成り立って欲しい」と念じながら、私は駐在代表や所長の説明を聞いていた。

当時、アブダビ石油の食堂には、長粒のエジプト米ではあったがコメがあり、日本食品がふんだんに用意されていた。テヘランに来て2ヶ月、日本食をほとんど口にできていなかった私には、アブダビ石油の食堂は天国。「地獄に仏」の思いであった。

昼食後に、南井にアブダビ市近郊の砂漠のゴルフ場に連れ出された。

ティーショットは学校の朝礼台のような鉄製の四角の台の上に登り、そこから打った。フェアウェーは砂をアスファルトで固めただけのもの。そこでは、各自が持参した芝生に似せて作られたマットを敷き、その上にボールを置いて打った。ラフは、砂漠の砂地そのまま。ボールは、ラフの砂地でも見えやすいオレンジ色。グリーンは、砂とアスファルトを適度に混ぜて緑のグリーンのようなフィーリングを出すように造られていた。

2ホール目を終えて3ホール目に入ったときには、私は暑さで、息も絶え絶えの状態であった。午後3時過ぎではあったが、地表温度は60度を超えていたと思われる。「せっかく連れてきて貰ったが、もう駄目だ。これ以上やると心臓が止まってしまう。先に上がらせてもらうよ」と欲得もなく、私はギブアップをした。砂漠のゴルフ場での厳しい暑さの初体験であった。この地では、白昼のゴルフは死と隣り合わせの危険な行為だとその時に知った。

南井に案内して貰った当時のアブダビの街は、建物もまばらで閑散としていた。アブダビ市の当時の人口は約6、5万人であった。現在の約150万人と比べれば、その閑散さが理解できよう。

街といっても、白い砂地の広がりの中に現地人部落が這いつくばるように点在し、海岸に沿って役所や石油会社のオフィスや周りを睥睨するようなアメリカ大使館の建物が距離を置いてポツンポツンと建っていた。

やや海岸から離れてキャッスル・ホスン（王宮）があり、その近くにスーク（市場）、役

所、商業ビルや外国人用のアパートなどが点在していた。当時は、少し高い所に上がれば、アブダビの町が一望できるような状況だった。

アブダビの街は、アラビア半島の本土から西北に突き出た逆三角形の小さな島にある。アブダビのアブーは「お父さん」、ダビーは「かもしか」の意味で、「かもしかお父さん」という意味だ。

アブダビ有力部族のバニヤース族はアラビアの由緒ある部族で、17世紀前半にサウジアラビアのネジド（サウジアラビア中央部の高原地帯）からアブダビ内陸部のリワ砂漠に移動してきたと言われている。アブダビ首長家のアル・ナヒヤン族が属していたアル・ブ・ファラヒ支族のお父さんがかもしかを追ってアブダビ島に入り、水を見つけたのは1761年のことである。

水があれば、人は住める。それまで砂漠でラクダや羊を飼っていたバニヤース族は、水を発見した後にその生活を真珠取りや漁業、船造りなど海の生活に傾斜させながら、ここに住みつくようになったのである。

このアブダビで石油が発見され、ダス島からアブダビ最初の石油が輸出されたのはアブダビで水が発見されて200年後のことであった。

アブダビの石油の歴史は、1939年1月に休戦海岸石油開発会社（株主は、BP、シェル、CFP、モービル、エクソン、Partex）がシャクブート首長と陸上の探鉱開発のための75年間の利権契約を結んだことから始まった。すぐに始まった地質調査作業や探鉱掘削作業は第2次世界大戦の勃発によって中断され、再開されたのは第2次世界大戦後の1946年である。1960年にはバブ油田で商業量の原油の埋蔵が発見され、1963年にジュベルダーナからの原油の輸出が始まった。社名も1962年にはアブダビ石油会社（ADPC）となった。

この協定によって、アブダビ首長には利権契約のボーナス、探鉱段階や、商業ベースの石油発見段階での利権料、それに加えて輸出される原油1トンに対してのロイヤリティが入ることになった。

1953年には、海上での利権が認可され、この海域の原油を探査、開発するためにアブダビ海上石油開発会社（ADMA、株主はBPが三分の2とCFPが三分の1）が設立された。同社は1958年に石油を発見し、1962年にジュベルダーナからアブダビ初となる石油輸出を開始した。

これらの石油開発によって、アブダビには莫大な金が入り始めた。それまでの貧しい感覚から抜け切れず、開発よりも不測の事態のために金を蓄えておかなければならないと考えるシャクブート首長は使い切れないほどの大金を自分1人で抱え込み、国民の不満は次第に高まっていった。

これに対して石油の収益はアブダビの人々のために使うべきであるとする弟のザイドが軍隊を率いてホスン城を取り囲み、無血クーデターによって兄のシャクブートから王位を奪還したのは1966年8月6日のこと、私がアブダビを訪問したのはそれから7年しか経っていない時であった。

アブダビを統治するアル・ナヒヤン族の始祖は、18世紀にアル・ブ・ファラヒ族から別れたナヒヤン族長である。当時、砂漠の民には部族同士の抗争はつきものであった。権力を握るために兄弟や従兄弟、場合によっては父親を殺すことも許されていた。幾多の血塗られ

た歴史を経て、1855年にザイド大王として知られるザイド・ビン・カリファが族長に就任すると各部族は団結し、1909年まではイギリスの協力の下で平和が保たれた。

しかし、ザイド大王の後継をめぐる、首長家の中で競争と不和が再燃した。父の死の前に次男のタフヌーンが長男のカリファを暗殺して1909年に大王の後を継いだ。1912年にタフヌーンが弟のハムダンに暗殺され、そのハムダンも1922年に弟のスルタン（ザイド大王の孫のザイドの父）に、そのスルタンも1927年に弟のサクルによって暗殺されてしまう。

スルタンの未亡人サリマは強い気性の女性で、自分の子供たちを首長の座に就けるために1928年にマナシール部族にサクルを暗殺させ、「これで正当なスルタンの子供たちに権力が戻った」と言い、長男のシャクブートが25歳の若さで首長となった。

サリマは自分の夫が殺された辛い経験から、子供たちには「殺し合いは絶対にしないように。これから首長はシャクブートからザイド、ハッザー、ハーリッドの順で跡を継ぐように」、きつく申し渡したという。

結果的には、権力の座はシャクブートからザイドへ、ザイドからその長男のハリファに渡ったが、ザイドは母サリマの教えを守り、追放した兄シャクブートも含めて兄弟たちを厚く遇した。

私が宿泊したヒルトンホテルの真ん前にはペルシアン・ブルーの美しい海と自然のままの砂浜が広がっていた。舗装道路や防波堤などはまだ影も形もなかった。私はこの自然のままの砂浜で南井の家族と釣りを楽しんだが、入れ食い状態で釣り糸を垂らすとキスがいくらかかかった。

砂浜に腰を下ろして砂を手にとると、砂粒1つ1つが仁丹のように丸い。砂は石が風に飛ばされてできるので、丸くなるのだと聞いた。日本では、砂といえば、岩石が流されて細かくなってできる川砂であるが、ここでは砂の形が違う。出来方も違っていた。

「これはなにか分かりますか」と南井が海岸沿いの道で指差したのは、天井のない葦簀張りのいくつかの小屋。中には絨毯が敷いてあるのが見えた。売春宿であった。真珠採り男たち用から始まった、相手はイラン女性だと聞いた。数千年の歴史のあるアラビア湾の真珠採りは日本のミキモトの養殖真珠に押され1930年代に衰退してしまった。変わって石油の富によってこの地域は急速に発展し、周辺国から大勢の出稼ぎ人が入った。これらの男たちをも癒しただろう砂地の上の小屋であった。

その夜、数少ない家族帯同者であった小林先輩の家に、私の歓迎会のために丸善石油からの出向者やその他のアブダビ在住の日本人が集まってくれた。中には、日本の自動車をアブダビで売り始めていた東京外大の後輩の商社の駐在員も交じていた。当時のアブダビ在住の日本人はアブダビ石油関係者、陸上で石油を試掘中であった中東石油関係者、2社の商社駐在員などだけであった。

全員が小林先輩の奥方手作りの料理に舌鼓を打った。アラビア湾特産のハムール（日本では、高級魚の「くえ」）などの刺身がふんだんに出された。海のないテヘランにいる私にとってはお目にかかれないご馳走だった。ここでは、外国人は酒も手に入る。やがて、宴もたけなわとなり、ガルフ・ブルースが歌われた。

「夕日に映えるアラビア湾の

ふちどる浜辺にさざ波白く
砂丘にありて デーツに憩えば
より来る羊の声細し
ああ、ガルフは砂漠の町
果てしなき広がり」

日本鉱業からアブダビ石油に出向していた杉浦の詩に、丸善石油の東京在勤時代に独身寮で一緒だった広岡が曲をつけたのだという。けだるいアラビア湾の情景がにじみ出ている名曲であった。

最後は、「フィアマネラ・アブダビ（さらばアブダビよ）」。

「俺を泣かせるアラビア湾の
空の青さよ 海の音
勤めを終えて今ぞ行く
リグに別れを告げようぜ
さらばアブダビ フィアマネラ」

みんなが立ち上がり、肩を組み、輪になって歌った。素晴らしい歌であり、異国の地での感動的な宴であった。

この宴で送られ、翌日私は次の訪問地カタール目指してアブダビを後にした。数年後に私がここで家族と住むことになろうとは思ひもしない、最初のアブダビ訪問であった。

2-2 カタール - 日の丸の旗をつけて

アブダビからカタールへの飛行時間は55分。

カタールの面積は、約11,400キロ平方メートル（秋田県よりもやや狭い面積に相当）。

カタールは古くはアブダビと同じく何もない無人の砂地であったが故に場所として特定されず、近世になってもバーレーンに属するのかオマーンに属するのか、はたまたハサ（サウジアラビアの東部地方）に属するのか明らかでなかった。

サウジアラビアのネジド地方に興ったセムの子のアドナーンを祖とする北部アラビア有力部族のアネイザ部族連合のウトビ族に属するハリーフア家は、聡明で進取の気性に富んだハリーフアが首長の時の1716年にクウェートに移住した。ハリーフアの死後の1766年には息子のムハンマドが率いるハリーフア一族がバーレーンの真珠を狙って、クウェートからカタールの西岸のズバラという小村に移住した。この小村がムハンマドの時代に真珠採りと交易の中心として栄え、地域でその重要性を増した。

ムハンマドの跡を継いだ兄ハリーフアの没後カタールの首長となった弟のアハマドが1783年に、当時バーレーンに根を張ろうとしていたペルシャ人を激闘の末に破ってバーレーンを占領した。これが現在のバーレーンのハリーフア王家の始まりである。その後、ハリーフア家はズバラを本拠地としてバーレーンとカタールを治めた。

1780年代末からカタール周辺に姿を見せるようになったサウジアラビアの攻撃を避けるべく、アハマドの子のスレイマーン時代に、ハリーファ家はズバラからバーレーンに移住した。

1799年にバーレーンはオマーンに占領され、スレイマーンはオマーン放逐のためにサウジアラビアのサウド家に支援を求めた。1809年にサウジアラビア軍はオマーンを放逐したが、そのサウジアラビアにバーレーンとズバラも占領されてしまい、スレイマーンはサウジアラビアの本拠地であるダルイーヤに幽閉されてしまった。

1818年にダルイーヤがトルコによって破壊されるにいたって、スレイマーンはここを脱出してバーレーンに戻り、再びバーレーンの統治者となった。

一方、カタールの東岸にあったドーハという部落で力を伸ばしていたのがアラブの豪族であったサーニー家であった。生業が海上での略奪だったので、1821年にはイギリスの東インド会社によって村落が破壊されて近くの島に逃げ出し、舞い戻ったものの海賊行為をしていたので1867年にまた破壊され住民は追い出された。

翌1868年、ムハンマド・ビン・サーニーがイギリスと海上での戦争禁止を旨とする合意を結び、これによりサーニー家はバーレーンに服属しておらず独立していると認められた。

その後1871年にカタールはオスマン・トルコに占領されたが、1882年ごろになるとイギリス官憲の力がカタールにも及ぶようになった。このころサーニー家が勢力を取り戻し、1893年に第2代首長のジャーシムがトルコの軍隊を撃退して、カタールにおけるサーニー家の支配権を確固たるものにした。

1913年には、イギリス・トルコ間でカタールの自主権が認められ、1916年に第3代首長のアブドゥラーが、他の湾岸諸国と同様にイギリスとの間で保護条約を結び、カタールはイギリスの保護下に入った。

1935年には「赤線協定」の例外としてアングロ・ペルシア石油がカタールで石油の採掘権を取得し、翌年に掘削を開始、1940年には西部のドハーンで石油を発見した。

第2次大戦後になって石油の生産が開始され、1949年にウム・サイドからヨーロッパ向けに石油が初めて出荷されるや、数マイルの海岸線にへばりついていた漁村ドーハは、たちまちのうちに近代的な街に変貌した。

私が乗った飛行機は高度をぐんと下げて、ペルシアン・ブルーの海からドーハの街に入った。眼下には、一直線に海岸に沿って伸びる舗装された道路。それに続くドーハの街並み、狭い市街だ。それでも、アブダビよりは整備されているように思えた。やがて、飛行機はドーハ空港に到着。昼過ぎにはガルフホテルにチェックインをした。

翌日、私はカタール石油省と日本大使館を表敬訪問した。

当時のカタール石油省の石油局長は後にOPECの事務総長やカタール・ペトロリアム(QGPC)の総裁を務めたジャイダ氏であった。見も知らぬ日本人からのいきなりの電話、それも下手な英語、いま思うとよく会ってくれたものだが、カタールの石油事情、原油価格の見通し、丸善石油として出来ることかかないかなどの質問に彼は物憂さげに応答してくれた。

ご本人はアメリカの大学を卒業したインテリ。帰りがけに「ウム・サイドの製油所を見たい。アレンジをして貰えないか」と頼んだら気が進まないようであったが、「1万キロも離

れた日本から来たんだ」と粘ったら、電話で製油所に午後4時の受け入れを指示してくれた。

当時の日本大使館には塩谷代理大使が在勤していた。表敬訪問をした折に「午後ウム・サイドの製油所を見に行く」旨を告げると、「同行したい。大使館の車を出します」と言われた。かくして、私は初めて日の丸の旗をつけた車に乗ることとなった。

カタールの午後、大使館の車はきらきらと輝くペルシアン・ブルーの海沿いの道を、ドーハから一挙に南下した。車内の後部座席には塩谷代理大使と私。大使車の前部には日の丸の旗が風にはためいている。私は、偉くなったように錯覚した。

やがて着いたウム・サイド製油所は製油能力は7千バレル/日。装置もトッピングとガソリン製造装置のみの簡易製油所であった。当時アラビア湾沿岸では、イランのアバダン、クウェートのアハマデイ、サウジアラビアのラス・タヌラに世界屈指の大製油所があったが、あとの湾岸諸国で製油所があったのはバーレーンとカタールのみ。アブダビ、オマーンには、製油所の影すらなかった。

ジャイダ局長の紹介に加えて日の丸の旗のお陰もあったのだろう、われわれの車が着くと製油所の門はすぐに開けられ、英国人のエンジニアが所内を案内してくれた。「2万キロリットルの重油が売れないで、困っている。これを買ってくれないか」という依頼を受けて、製油所の見学を終えた。

当時のカタールには日本人は大使館と商社関係の数人しか住んでいなかったが、夜はアブダビとカタール両方の事務所の所長を兼務して両国間を往復していた日商岩井の所長宅でご馳走になった。インド人のボーイの料理をつついて2人だけで心おきなく語りあった。

翌日私はカタールを離れ、バーレーンに向かった。カタールは石油生産の時期が早かったので、アブダビより開けてはいたが、街が小規模で何やら淋しいというのが印象であった。因みに、当時のカタールの人口は9万人、ドーハの人口は約8万人であった。

2-3 バーレーン - アラビア半島初の石油生産

ドーハからバーレーンのマナマ空港までは45分のフライト。

バーレーンの面積は、786.5平方キロメートル（宮城県仙台市とほぼ同じ大きさ）。

午後4時を過ぎてもまだ強い日ざしの中で、白く反射するカタール半島の砂漠地帯を横切って、ペルシアン・ブルーの海に出ると飛行機はすぐに高度を下げた。

マナマ空港の先に、空港があるムハラク島とバーレーン本島をつなぐ数キロのコーズウェイ、その先に緑の木々と密集した建物が交錯するマナマの市街が広がっていた。明るく鮮やかな景色であった。近代的なビルも点在し、コーズウェイにはたくさんの車が走っているのが見えた。さすがにバーレーンだ。アブダビやカタールとは異なり、ここは都会だ。当時のバーレーンの人口は23万人、首都マナマの人口は、約8万であった。

飛行場には、ガルフ航空やMEA（レバノンの中東航空）、BA（英国航空）など多くの飛行機が駐機しており、空港ロビーも賑やかで活気に満ちていた。

人々の服装もアラビア服一色ではない。むしろ、アラビア服の方が少ないように思えた。バーレーン女性も顔を隠すどころか、モダンな服装で働いていた。宿はバーレーン随一のガ

ルフホテル。ホテルでは酒も飲めたし、アラビアの国にいるという感じはそうしなかった。翌日は情報省に行き多くの資料を集め、それから経済省（当時は石油省はまだ独立していなかった）を表敬訪問した。

このバーレーンは古くから人々が住んでいた場所である。紀元前5000年ごろにはすでに人が住んでいたという。

その後ほぼ無人の時代があったが、アッカドのサルゴン王が南メソポタミアで覇権を争った都市国家を統一してアッカド帝国を統一した紀元前2300年ころ、このバーレーン（古くはディルムンと呼ばれていた）に南メソポタミアの西方の砂漠に住んでいた遊牧民のアモリ人が移住した。

アッカド帝国の時代もその後興ったウル第3王朝の時代も、ペルシャ湾の海上貿易は南メソポタミアと銅の産地であるマガン（オマーン）間で直接行われ、バーレーンの出番はなかった。この当時、バーレーンはアッカドやウル第3王朝とマガンの船が補修や水や食料の補給のために立ち寄る場所に過ぎなかったようだ。

紀元前2003年にウル第3王朝が滅亡し、メソポタミアの混乱期に乗じてバーレーンは海上交易に乗り出し、やがてマガン、メルッハ（インダス川流域）と南メソポタミアをつなぐ海上交易を独占した。マガンの銅、メルハの象牙や砂金、紅玉髓、紫檀や黒檀、アフガニスタンのラピスラズリや錫、バーレーンの真珠、サンゴ、ベっ甲などがバーレーンの商人によって南メソポタミアへ運ばれたという。

この海上交易の発展によって、バーレーンはメソポタミアの諸王国にひけをとらない海洋王国へと成長を遂げ、メソポタミアの諸王とも外交関係を結んでいた。メソポタミアの王にとっては、海上交易を握ったバーレーンとの関係維持は死活問題であった。バーレーンに残る7万5千基もの膨大な古墳の多くはこのころに造られたものであるという。ハンムラビが紀元前1761年にメソポタミア統一した後にはバーレーンは急速に衰退し、紀元前1745年のディルムンから銅を輸入したという記録を最後に、ディルムン（バーレーン）の名は史上から姿を消してしまう。

バーレーンがこのように古くに栄えたのは、豊富な水、重要な地理的位置、それに真珠産業（19世紀末、世界の真珠の9割がバーレーン産）によるものだった。因みに、バーレーンは、アラビア語で2つの海の意である。1つはバーレーンを囲む海水の海、もう1つは地中の豊富な淡水の海である。

その後のバーレーンは、バビロンを中心に起こったカッシート王朝（前16世紀～前12世紀）の支配下に入り、その滅亡とともに歴史の表舞台から姿を消した。新アッシリアのサルゴン2世（前721～前705年）の時代にディルムンの名が再び史上に登場し、朝貢したと記録されている。

その後興った新バビロニアがディルムンの支配権を引き継ぎ、さらにその後支配権はアケメネス朝ペルシャに引き継がれた。その後バーレーンはアレキサンダー大王の後を継いだセレウコス朝や2世紀前半のバルテティア、3-4世紀にはサーサーン朝ペルシャの支配下に入った。

ダマスカスのウマイヤ朝の支配を経て750年にアッバース朝が創設されると、この地は再び黄金時代の到来を迎えた。世界の中心のバグダッドの都と東の中国、地中海のビザンチン、さらにはヨーロッパとの交易の道としての水路が重要な役割を果たし、アラビア湾は

再び世界の幹線道路となった。人や物資を載せた船がこのペルシャ湾を行き来し、水と真珠を求めてこのバーレーンに立ち寄ったのであった。

1258年のアッバース朝の没落とともによりバーレーンは土地の部族の抗争の場と化すが、その頃までバーレーンという名前はアブダビ、カタールや休戦海岸などを含む東アラビア湾一帯の総称として使われていた。

20世紀になってペルシャ湾は石油の発見によって長い眠りから醒め、エネルギーの太宗をなす石油を運ぶ世界の大動脈として、再び歴史上に登場した。アメリカへ、ヨーロッパへ、日本や中国へと石油を積んだ巨大タンカーがこのペルシャ湾を航行してきた。

ペルシャ湾岸諸国で石油が最初に発見されたのは、バーレーンである。

イラクでは、「ミスター・ファイブ・パーセント」と異名をとったアルメニア人グルベキアンがチグリス河に沿って大油田がある筈だと信じて1925年にトルコ石油会社を設立し、イラク政府から石油利権を取得した。

これと同じ頃、アラビア半島にも石油があるのではないかと調査をしている者がいた。ニュージーランド人の元軍人のホームズ少佐である。

彼は1922年にサウジアラビアで石油利権を取得したが、その期限が切れてしまい、当時英国保護領であったこのバーレーンに移って、1925年に首長から石油利権を取得した。ホームズは、バーレーンの石油を支配するのにもっとも有利な立場にあった英国にこの利権を売りに行ったが、当時イランとイラクからの石油で十分資源確保ができていたBPは、ホームズの利権にはなんの興味も示さなかった。そこで、ホームズはやむなくこの利権をアメリカに売りに行った。価格は5万ドル。

エクソンは、愚かにもこれを断る。替わってガルフ社がこの利権を買い、地質技術者をバーレーンに派遣しての現地調査の結果石油の存在を確信した。しかし、原油の探鉱・開発・生産は共同事業として行わなければならないと断念した。結果的にバーレーンの石油利権は、赤線協定の部外者であったアメリカのソーカル社に渡った。

当時英国の保護下にあったバーレーンの首長は、英国政府からの圧力でソーカルに対してこの会社の取締役の過半数を英国人とすべきと主張した。これに対して、ソーカルは中東石油利権の門戸開放を主張していたアメリカ国務省の介入を得、さらに英国を刺激しないようにカナダの子会社を通して利権を取得する形でこの問題を乗り切った。

そして、1931年にバーレーンで石油が発見され、1933年から石油の輸出が始まった。石油の生産量は少なかったが、このバーレーンでの石油は発見が30キロ離れたサウジアラビアでの大油田発見へとつながったのである。

午後に当時日本の商社としては唯一バーレーンに支店を構えていた伊藤忠商事の事務所を表敬訪問した後に、私はタクシーを飛ばして「アダリ・プール」を訪ねた。ここが、私が初めて見た砂漠の中のいわゆる「オアシス」となった。

アラビア半島の下には水を通さない岩盤の層があって、サウジアラビアの東部のハサ地方と沖合のバーレーン島方向に向かって緩やかな傾斜がある。そのため、遠くのアラビア半島西部の山脈に降った雨が広大な砂漠の下を流れてここバーレーン島に、また海の中にも湧き出していると言われている。その一つである「アダリ・プール」は、風にそよぐデーツの木々に囲まれ、アラビア湾の真夏の強い太陽の下で水面がさんさんと光っていた。

大勢の現地の大人や子供たちが歓声を上げながら、泉に飛び込み水遊びを楽しんでいた。水量は豊富だった。傍らを流れる小川には、ごうごうと音を立てながら泉から水が注ぎ込んでいた。

このバーレーンには明治13（1880）年に日本人が訪れている。「吉田正春使節団」を率いた外務省御用係の吉田正春と大倉商事副社長の横山孫一郎等らである。吉田らは、日本からブシェールに入港する途中にここに立ち寄った。

吉田は「ナツメヤシ林を数十分かけて通り抜けて炭酸ソーダを湧出した泉池に着いたが、水が鏡のような澄明だった。ソーダ水を飲んで爽快な気分になった」と書き残しているが、吉田が訪ねたのはどこの泉だったのだろうか。水流の記述はなく、ソーダ水の記述があるが、アダリー・プールの位置から同じ場所であった公算が高い。

帰途私は砂漠地帯のジャバル・アッ・ドハーン油田に立ち寄った。この油田からアラビア半島での石油生産のすべてが始まったのである。その砂漠の中に、アラビア湾最初の井戸が残っていた。あの有名な石油掘削用のホッパー1基がアラビア湾に沈もうとしている夕日に映えて、ポツンと立っていた。

2-4 クウェート - 俺は約32歳

クウェートに向けて私がバーレーンを飛び立ったのは、辺りがすっかり暗くなった夜になってからであった。

バーレーンを飛び立てば、サウジアラビアは眼と鼻の先。クウェートまでは約1時間の飛行。やがて、窓外の眼下の暗闇の中にポツンポツンと油田の火が見えてきた。アブカイク油田の火だろうか。とすると、左はラストヌラ。その先は、世界最大のガワール油田のあるサウジアラビアなのか。いよいよ世界の石油銀座に入ったのか。

1930年初頭、サウジアラビアのイブン・サウド王は、国の財政難から金を欲しがっていた。当時この王の顧問を務めていたのが、アラビア狂いで英国の対アラブ政策に批判的なイギリス人のヘンリー・セントジョン・フィルビーであった。このフィルビーがある日の午後、車の中でイブン・サウド王に「サウジアラビアの人たちは宝物の上に眠っているようだ。この宝の石油で金を作れるかも」と話したのである。

当時英国の保護領でもなく独立していたイブン・サウドはこれに素早く対応し、アメリカの知人を通じて、アメリカ人の地質技術者のカール・トウィッチェルに調査を依頼した。アラビア湾岸まで踏査したトウィッチェルはサウジでの石油の存在を確信し、テキサコ、エクソン、ガルフに話を持ちまわったが、前2者はまったく興味を示さず、ガルフはまたもや赤線協定の制約からこの話を断った。

ここで、バーレーンからサウジアラビアに眼を向けていたソーカルが素早くトウィッチェルにアプローチし、トウィッチェルを顧問として迎え、フィルビーには秘かにこの商談の成功報酬を約束した。

バーレーンでの石油発見によって、サウジアラビアの石油の存在は当時衆目の一致するところとなっていたが、バーレーンの石油発見の機会を逃したBPはサウジではイラク石油会社のメンバーが共同で事に当たるべきだとして、ソーカル社に対抗するべくサウジアラビアに交渉者を派遣した。

しかし、イラク石油会社の狙いはサウジアラビアにアメリカを入らせないことだけであり、熱心さや金額でもまったく話にならなかった。結局、イブン・サウド王に満足の行く金額を提示したソーカル社がサウジアラビアとの歴史的な石油利権協定の調印に成功した。1933年8月のことであった。

そして、アラムコ社が設立され、1936年には資金と販路を求めていたソーカル社から50%のシェアを買い取ったテキサコ社がこれに参加した。1938年にはダンマン油田、その後アブ・ハトリアなどの巨大油田が次々に発見されたのである。

その後もサウジアラビアの石油獲得には英米間で角逐があったが、1948年11月の赤線協定の廃棄に成功したエクソン、モービルのアラムコへの参加並びに1950年のタupp・ライン（ラスタヌラより、ヨルダンを経てレバノンのシドンに至る延長754マイル、直径30~31インチ、送油能力500千b/dの石油パイプライン）の建設によって、サウジでのアメリカの優位は決定的なものとなった。

そのアラムコの本拠地のダーラン、ラスタヌラの上をいま私は飛行機で越えていく。オイルマン冥利に尽きる飛行であった。飛行機は高度をやや下げ始めた。また、油田の火だ。サファニア油田だろうか。それとも日本のアラビア石油のカフジ油田の火だろうか。

クウェートはもうすぐだ。機は高度をぐんと下げ、「ノースモークキング・プリーズ」のサインが出ている。機の下には、再び火が見える。飛行機の翼が真赤に染まっている。両翼を焦がさんばかりの油田の火だ。クウェートのブルガン油田だ。

このクウェートも、石油の利権獲得をめぐる英米の角逐のあった場所であった。

BPは1914年以来なんとなくクウェートの石油利権を持っていたが、イランからの石油で十分であったため、この利権をほったらかしにしていた。

一方、1934年に例のフランク・ホームズがクウェート首長から得た利権売却の話がガルフ石油に持ちかけた。ガルフ社がこれに応じ、ホームズがガルフ社への譲渡について首長の許可を得ようとした時に、イギリスがこれに強烈に介入した。イギリスは当時すでにバーレーンとサウジアラビアに利権を得ていたアメリカをクウェートから締め出そうと図ったのである。

しばらくはクウェート首長のご機嫌とり競争をしていたBPとガルフの両社はやがて共同歩調をとり、ホームズと首長との折衝で1934年12月にクウェートの石油利権獲得に成功し、折半出資でクウェート・オイル・カンパニーを設立した。

そして、1939年に発見されたのが、ブルガン巨大油田である。そのブルガン油田が夜のしじまの中で、一面の炎となって私の眼下にあった。

やがて、飛行機はクウェート空港に到着した。空港ではニチメンの所長の出迎えを受け、クウェートでの初めての夜をシェラトンホテルで過ごした。

翌日、ニチメンのクウェート事務所で所長からクウェートについてオリエンテーションを受け、とりあえず日本大使館やクウェート情報省を廻ろうとドライバーを探したが、いない。「また、お祈りだな」と所長がいう。

なるほど、ここはイスラムの地。イスラム教徒は、1日に5回メッカに向かってお祈りを捧げなければならない。イエメン人のドライバーは敬虔なイスラム教徒。お祈りが終わるのを待つ以外ない。

お祈りが終わって出掛ける時に、「名前は？」と私がドライバーに訊くと、「アフマド」だ

と言う。ついでに、「何歳？」と訊くと、「約32歳です」との答えが返ってきた。「エッ、約32歳ってどういうこと？ふざけちゃいけないよ、真面目にやれよ」と一瞬思った。しばらくして、「砂漠には戸籍などない。約何歳もありだ」と気付いた。日本では考えられないことだったが、アラブでは正確な年齢が分からないというのは有りだ。きついクウェートのカルチャー・ショックだった。

クウェートの面積は、約17,800平方キロ（四国とほぼ同じ）。

当時のクウェートの人口は88万人、クウェート市の人口は約50万人。市のメイン道路であるサフィーク通りはなかなかのものであった。道幅も広く、左右には航空会社などのビルも立ち並び、欧米のブランド品を扱う店が軒を並べている。

当時のアラビア半島は、アブダビ、カタール、バーレーン、クウェートと北に上がって行くにつれて近代化の度合いが増した。開けたのは、バーレーンの方がクウェートより早かったが、より近代的な高いビルが立ち並ぶのはクウェートの方だった。石油の産出量、つまり石油収入額の差ゆえであったのだろう。

サフィーク通りが始まってすぐに石油省とシェラトンホテルがあり、通りの始点にはクウェートの門があった。クウェートはアラビア語で「小さな砦」という意味であるが、バーレーンと同じサウジアラビアのネジュド地方にいた北部アラビア有力部族のアネイザ部族連合のウトビ族が18世紀の初めにクウェートに移住してきて砦を築き、この地を治めるようになった。このクウェート門こそ、この国が始まったところである。

1756年には有力ファミリーのサバーハ家の現首長の祖サバーハ1世が正式に首長に選出された。このころ当時トルコの支配下にあったバスラが3年間ほどペルシャに占領されたことがあり、イギリスの東インド会社は1793年に拠点をバスラからクウェートに移した。クウェートは1時期トルコのバスラ総督の支配下に入っていたが、1896年に宮廷クーデターによって兄に代わって首長に就任したクウェートの中興の祖といわれるムバーラク大首長が寝返って、1899年にはイギリスと保護契約を結んだ。これによってクウェートは湾岸の対英貿易の拠点となり、その後発展を重ねてきたのである。

この地も吉田と横山が1880年に日本人として初めて立ち寄っている。

吉田等は伊東祐享中佐率いる軍艦「比叡」に乗船して品川から出発したが、香港からはスピードの速い郵船に乗り換えたので、「比叡」よりかなり早くブシール港に到着した。そこで無為に比叡艦の到着を待つよりはと、吉田、大倉商事の横山、それに通訳インド人の3人がバスラ、バグダード、バビロン訪問の途に立った。クウェートに立ち寄ったのは、その途次のことであった。

吉田らは上陸しなかったが、同じ船中に乗り合わせた酋長の服装や手を使った食事の様子や女性などを物珍しげに観察している。女性が顔を隠しているのを見て、日本古代の女性がかぶった上被を想起している。

私は、その後このクウェートをいやというほど足しげく通うことになろうとは露知らず、アラビア湾岸の旅を終え、バイルート経由で任地のテヘランに戻った。（続く）

主な参考文献：

「世界年鑑」 1975年版、(共同通信社、1975年)

「アブダビの昔話ー或るオイルマンの体験記」(吉田 祐司、講義録、2001年)

「東アラビアの歴史と石油」(川崎 寅雄、吉川弘文館、1967年)

「謎の海洋王国 デイルムン」(安倍 雅史、中央公論社、2022年)

「サウジアラビア 岐路に立つイスラームの盟主 (中公新書)」(小山茂樹、中央公論社、1994年)

「波斯紀行」(古川 宣誉、1891年、明治シルクロード探検紀行文集成(2)、ゆまに書房、1988年)

「波斯乃旅 (回疆探検)」(吉田 正春、1894年、明治シルクロード探検紀行文集成(2)、ゆまに書房、1988年)

「アラビア縦断記」山岡光太郎、1912年、明治シルクロード探検紀行文集成(2)、ゆまに書房、1988年)

「アラビア紀行」(中野英治郎、明治書房、1941年)